

平成 30 年 度 学 校 評 価 書

学校名	兵庫教育大学附属幼稚園
-----	-------------

1 学校教育目標

心身ともにたくましい子どもの育成	○ 健康な体の子ども	○ よく考えて最後までやりぬく子ども	○ やさしく豊かな心をもつ子ども
------------------	------------	--------------------	------------------

2 本年度の重点目標

(1) 園運営	<ul style="list-style-type: none"> 園運営が主体的かつ円滑にできるよう、園長のリーダーシップのもと、職員一人一人が明確な目的をもって力を合わせて取り組むよう努める。 記録をもとに話し合い、幼児のよさを職員間で共有することを通して、研究テーマ「保育の質を高めるために一学びが充実する保育に向けてー」（三年次）に迫る。 研究活動の成果を生かしながら、「うれしのタイム」における幼児の自発的な活動としての遊びを通じた教育の充実を図る。 保護者の子育て力向上を支援する取り組みや子育て環境をよりよくするための取り組みを行い、子育て支援事業の充実を図る。
(2) 教育研究活動	
(3) 地域への貢献	<ul style="list-style-type: none"> 地域に向けて積極的に情報発信を行うとともに、子育て支援ルーム「かとうGENKi」との連携を図る。 大学との連携では、大学教員を招聘しての研究活動や親子活動、保育活動を計画的に推進し、日々の保育へつなげるよう努める。
(4) 他校種との連携	

3 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

4 分野・領域ごとの学校関係者評価

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
園運営	○組織運営 ・職員一人一人の主体的な取り組みを促すよう、園長がリーダーシップを発揮し、大学と一体となった園運営を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 園長のリーダーシップのもと園運営を行うとともに、園務が着実に遂行されているかを会議等の場において点検した。 今年度を始めるにあたっては、改訂された教育要領を踏まえ、新たな教育課程の編成を全職員で行った。 全職員が自己目標を定め、常に意識して園運営、学級運営に主体的に取り組めるよう、会議やその他の場面で機会を捉えながら管理職が指導助言を行った。 働き方改革を進めていくために、今年度は、教育の質を確保しながら行事の見直しを行うとともに、会議等で話題にし、職員の意識化を図った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 働き方改革については、職務内容や行事の見直しをさらに進めていきたい。 	<p>学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価</p> <p>[園運営] ・妥当な自己評価である。</p> <p>○組織運営 ・働き方改革は推し進めてほしい。教員がする仕事にはしっかりと時間をとってもらい、教員が担わなくてもよい仕事は大学にスタッフを補充してもらおう等、大学と一体となった運営をしてほしい。</p> <p>○説明責任 ・教員で共有している目標（週案のねらい等）を、月1回程度でよいので保護者によりわかりやすく説明する取り組みをもう少し入れてもらえるとなおよい。</p> <p>・預かり保育担当者への伝達等を含む保護者支援は、大変さもあるので、負担軽減との兼ね合いを検討する必要がある。</p> <p>○危機管理体制 ・三校園の避難訓練を初めて実施した取り組みは評価できるが、車の渋滞等の多くの課題があるので、より実際的に計画・実施していく必要がある。</p> <p>・入構者については、警備のところでチェックしているが、名札をつけていない人がいると保護者としては不安にもなるので、名札着用の徹底やどこで配布してどこから着用するか等、三校園で再度確認・共有できるとよい。</p>
	○学年、学級経営 ・目指す各学年や学級の姿に向け課題を確認しながら、計画的に保育を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 新たに編成した教育課程に基づき、学年経営及び学級経営の方針を立てて保育を進めた。 学期ごとに会議等で振り返り、達成状況や課題を確認しながら、保育の質を高めるよう取り組んだ。 	A		
	○説明責任 ・本園の教育方針や保育の内容については、管理職や担任が機会を捉え、話したり文章にしたりして、伝えていく。	<ul style="list-style-type: none"> 「ふよっこだより」を年23回発行し、教育方針や園で行われる保育の内容、各行事の主旨・取り組み等を伝え、園の保育や幼児の育ちに保護者の理解が得られるようにした。 園の教育を理解してもらうため、全学年の保育参観及び保育参加日（「ふよっこデー」）を年7回実施し、保育を見る観点を事前に伝え、当日も機会を捉えて保護者に説明をし、理解を得るように努めた。 降園時には、各担任から学級の保護者に対して、その日の幼児の姿をもとに、保育のねらいや幼児の育ちを伝えるようにしている。また、園長が儀式的行事の後に本園の教育方針について説明する、副園長が年2回のクラス毎の学級懇談会に参加する、さらに機会を捉えて日常的に保護者と話すことで本園の運営について理解を得るようにした 預かり保育利用者は、日々の保育説明を聞く機会が少ないため、今年度は、迎えの時間を利用して直接話す機会を作ることに努めた。 	A		
	○危機管理体制 ・「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引き」に基づき、毎月実施の「子供安全の日」における安全教育への意識付け(避難訓練等)及び施設設備の点検とその改善・拡充に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> 園内の施設、設備、備品等の安全点検を随時行うことに加え、PTA役員による安全点検を年2回行い、より細部にわたっての点検と迅速な改善を行った。 毎月1回「子供安全の日」を設け、学年に応じた安全指導を行うとともに、地震、火災等の避難訓練、保護者と連携しての引き渡し訓練、消防署員を招聘しての訓練を行った。さらに、今年度は、子育て支援ルーム「かとうGENKi」を含めた附属三校園等合同の避難訓練を実施し、きょうだい関係のスムーズな引き渡し訓練を行った。 幼児の怪我や疾病等緊急時の初期対応を適切にできるよう、職員の研修を行ったり、消防署員を招いての心肺蘇生法講習会を開催したりした。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 山国地区のすべての子供たちの引き渡しを視野に入れ、方法等の検討をしていく必要がある。 	

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育研究活動	<p>○教育活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究活動の成果を生かしながら、「うれしのタイム」における幼児の自発的な活動としての遊びを通じた教育の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究成果を生かし、「うれしのタイム」における遊びを通じた教育の充実を図るために、朝の打ち合わせ時には、その日の保育のねらい等を担任より示し、副担任や他学年の職員とも共通理解を図りながら保育を行った。 今年度は、週の初めに、各学級の週案を副担任・養護教諭を含む全職員に周知し、全職員の共通理解を図りながら計画的な保育を行うよう意識して取り組んだ。 園行事等は、担当者の計画のもと、行事の主旨やねらい、取り組みの方向について共通理解するとともに、行事後には、保護者アンケートも参考に振り返りを行い、次年度につながるようにした。 	A	
	<p>○幼児理解</p> <ul style="list-style-type: none"> 幼児一人一人のよさや特性に応じた適切な指導ができるように、キンダーガーデンカウンセラーのアドバイスも参考に職員間で情報を共有し指導にあたる。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児一人一人の記録をとり、その子のよさを理解し、よさが生かされ学びが充実するように環境の構成や援助を考えることを継続して行うとともに、定期的に全職員で話し合いを行った。 キンダーガーデンカウンセラーに、各クラス学期に2～3回観察してもらい、個々の幼児に応じた指導方法のアドバイスを受けたり、保護者の相談へとつないだりすることで、より個の特性に応じた指導が行えるように努めた。キンダーガーデンカウンセラーからのアドバイスが記載された記録を必要に応じて閲覧したり、全職員参加の園内委員会（年3回）を開いたりし、情報が共有できるようにした。個別の指導計画は、定期的に見直し、次年度に引き継げるようにしている。 加東市発達サポートセンターはびあによる加東市在住幼児に対する個別指導を受ける場をもった。 就学にむけて、希望進学先調査を行い、必要に応じて各小学校と連絡を取り合い、日常の幼児の様子を見てもらう機会を設け、進学先のスムーズな決定と進学後の適切な受け入れ準備を図った。また保護者からの進学相談にも担任や管理職があたり、就学予定校とも連携を図った。 	A	
	<p>○研究活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 職員間で幼児のよさを共有し保育の質を高めることを目的とした、研究テーマ「保育の質を高めるためにー学びが充実する保育に向けてー」（三年次）を追求する。 	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度に引き続き、記録から子供のよさを全職員で共有し、その子のよさを伸ばしながら学びが充実する保育に向けて、必要な環境構成や教師の援助について検討を重ねた。 継続して研究を続けることで、幼児理解や教師の関わりをより確かなものにし、職員の専門性を高めるとともに園全体の保育の質の向上につなげていった。 	A	
	<p>○子育て支援事業</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者の子育て力向上を支援する取り組みや子育て環境をよりよくするための取り組みを行い、子育て支援事業の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 機会を捉えて幼児期の育ちについて伝えていくとともに、「ふよっこデー」の実施や「きっすくらぶ」による保護者の保育参加など、保護者の子育て力向上を支援する取り組みを行った。 今年度は、園行事「みんなでコンサート」のPTA音楽部演奏に、父親や日頃仕事等で参加できない人にも参加を呼びかけ、保護者の活動を広げた。 子育て環境をよりよくするための昨年度からの取り組みである、附属小学校の参観及び懇談日に、一時預かり保育を実施した。 昨年度から引き続き、対象・時間等を拡充した預かり保育を実施し、就労等家庭の子育て環境の支援を行った。 	A	

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>[教育研究活動]</p> <ul style="list-style-type: none"> 適切な自己評価である。 <p>○教育活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 週初めに、全職員での共通理解を図る取り組みは評価できる。 保護者アンケートはとても大事で、園がよりよくなるために必要である。小学校参観日の一時預かりを始めたように、アンケートに応じて園が新たな取り組みや見直しをすると、保護者としてもきちんと声を挙げようと思え、質の向上につながるよい循環になる。 <p>○幼児理解</p> <ul style="list-style-type: none"> キンダーガーデンカウンセラーに学期に2～3回も子供の様子を見てもらいながら、相談もできる場があるという環境はなかなかないので、保護者にとって安心である。キンダーガーデンカウンセラーがいることは、教員にも学びの機会になっている。そういうよいところをもっとアピールするとよいのではないか。 <p>○子育て支援事業</p> <ul style="list-style-type: none"> 遊戯室で行った今年度の「みんなでコンサート」では、PTA音楽部からの上手な呼び掛けがあり、父親等の演奏への参加があった。大人が楽しむ活動が保護者にとっても子供にとっても有意義なものとなっていたと感じる。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
地域への貢献	<p>○開かれた幼稚園づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の未就園児親子参加の「子育てひろば」を年間を通して実施するとともに、子育て支援ルーム「かとうGENKI」とも連携して、地域、幼稚園、家庭が共に育つ活動を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> 未就園児親子参加の「子育てひろば」を、年10回実施した（年間の登録者数は85組）。活動時間は約2時間で、活動の前半は「うれしのタイム」で在園児と共に遊び、後半は遊戯室において、クラス単位で在園児や保護者有志と共にする活動、園長、副園長による子育てワンポイント講座、触れ合い遊び、大学院生による遊びなど内容を工夫した。 子育て支援ルーム「かとうGENKI」とは、園児が訪問し「子育てひろば」の案内をしたり、PTA主催の「子育て講座」等の案内をしたりするなど一層の連携を図っている。 昨年度より、月ごとの行事を中心に幼稚園の様子をホームページに掲載し、継続して情報の発信を行った。 運動会等の行事や米づくり等の活動においては、保護者や関係の方々に協力してもらい実施することで、より豊かな活動になるよう取り組んだ。 	A	
	<p>○研究発表や公開保育</p> <ul style="list-style-type: none"> 年2回の研究発表会を通して、研究の成果を発表し、地域及び社会に貢献する。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究発表会を兵庫県教育委員会、加東市教育委員会の後援のもと年2回開催し、兵庫県内外の幼稚園、保育園、こども園の先生方を中心に延べ約200名幼児教育関係者が参加した。午前中は公開保育、午後は、研究テーマ「「保育の質を高めるために一学びが充実する保育に向けて」」に基づく研究協議、本学幼年教育・発達支援コース教員を講師とした講演を行った。 今年度は、兵庫県農政環境部主催の「エコスタディ☆フェス」において、本園の米づくりや野菜づくりの教育活動を県下の保育関係者に向けてポスター発表を行った。 	A	
他校種（小・中・高校・大学）との連携	<p>○校種間連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 近隣の高校も含めた他校種と連携し互恵性のある交流活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 附属小学校との交流では、5歳児が5年生と11月に、1年生と3月に交流給食を実施した。また、5歳児がスムーズに就学できるように、3月に附属小学校児童の通学班と共に親子での通学体験を実施した。 附属中学校との交流では、4・5歳児と3年生間で、中学生がペアの園児に手作りの玩具を持参したり、一緒に遊んだりした（7月と9月）。 今年度は、附属三校種の交流として、5歳児・小学5年生・中学2年生が参加するお茶会を行った（2月）。 県立社高等学校との交流では、1年生が「触れ合い育児体験」として、園児と一緒に遊んだり弁当を食べたり、体育科生徒が集団行動を見せたりした。 本園職員が県立社高等学校の授業に、職業紹介の講師として参加協力した。 附属三校種の職員間の連携を進める三附属連携推進協議会において、三附属の職員が各部会に分かれ情報を共有するとともに、授業や保育を見合う機会をもち、幼小中の連続性に着目したカリキュラムの検討を行った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 幼小中のカリキュラムの接続と教育活動の連携をより一層図っていくように努めたい。
	<p>○実地教育（教育実習）</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学教育とつながりをもった効果的な初等基礎実習を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各クラスで行う反省会に大学教員が参加し、大学の授業（リフレクション）と連携をもたせ、より効果的な指導を行った。 実習生には、実習後も本園の研究発表会への参加（大学の授業「教職実践演習」の一環）並びに運動会、生活発表会等の園行事の参観を呼びかけ、多くの参加者があった。 	A	
	<p>○大学との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学教員を招聘しての年2回の親子活動や年4～6回の保育活動を推進したり、園内研修会に参加、助言を求めたりするなど大学との連携を密にした取り組みを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼年教育・発達支援コースの大学教員には、本園の保育の質の向上と研究推進のために、研究発表会の講師やオブザーバーとしての参加を得た。 3・4歳児の親子活動（各年1回）、4・5歳児の陶芸活動（4歳児2回、5歳児1回）を大学教員指導のもと実施した。親子活動は、それぞれの年齢や発達に合った内容で、親子の触れ合いのよい機会となった。陶芸活動は、大学キャンパスでの活動が継続されており、本格的な陶芸体験ができた。また、大学キャンパスでの活動が有意義な体験となるよう、大学構内散策や食堂で昼食をとる機会も設けた。 	A	

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>[地域への貢献]</p> <ul style="list-style-type: none"> 適切な自己評価である。 <p>○開かれた幼稚園づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ホームページの毎月のアップを楽しみにしている保護者もいる。保護者にとっては、ふよっこだより以外の情報が得られて有意義であり、外部への情報発信にもなっている。内容は充実しつつあると思うが、もっとアクセスしてもらおうアピールをするとよいのではないかな。 園の子供たちだけではなく、地域の子供たちの育ちや教育につながるような発信源になってほしい。 <p>○研究発表や公開保育</p> <ul style="list-style-type: none"> 公開保育の土曜日開催は他園の先生が参加しやすく、実際に今年度の参加者も多くなっている。
<p>[他校種との連携]</p> <ul style="list-style-type: none"> 適切な自己評価である。 <p>○校種間連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校園が近くにあるメリットを生かした取り組みが進んでいることは評価できる。もっと連携できることがあるだろうし、研究ベースでの連携も模索していけるとよいのではないかな。 <p>○実地教育（教育実習）</p> <ul style="list-style-type: none"> 教員、大学教員、実習生とリフレクションを共にできる場があることは附属のメリットなのではないかな。 多くの実習生の受け入れは負担だと思うが、教員側の学びにもなるし、実習生同士の協働経験にもなるというメリットともなっている。